



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(九) 『幼稚園記附録』——幼稚園とは何か

『幼稚園記附録』の原典について

『幼稚園記』が出版されてからちょうど一年たった明治十年七月、『幼稚園記附録』が出版された。

これまでほとんど論じられたことはないが、『幼稚園記附録』にはふたつの原典がある。ひとつは、エリザベ

ス・ビーボディー (Elizabeth P. Peabody) と彼女の妹
メアリー・マン (Mrs. Horace Mann) の共著“Moral
Culture of Infancy and Kindergarten Guide” (J. W.
Schenhorn & Co.) で、これについてはよく知られて
いる。これが全体の四分の三を占めていることから、同
書を『幼稚園記附録』の主原典とすることに問題はな

い。ただし、関信三が訳したのは、このうち、ピーボデーの Kindergarten Guide の部分のみである。もうひとつの原典が、ウェルチ (Welch, A. S.) 著 “Object Lessons Prepared for Teachers and Primary Classes” (A. S. Barnes & Company 1873) で、後部に追加される形で収録されている。

『幼稚園記附録』にふたつの原典があるのはなぜだろうか。主原典であるピーボデーの書はアメリカで最初に書かれた英語による幼稚園案内書で、米国幼稚園史における記念碑的な書物であった。初版は一八六四年であるが、刊行後数年して、Kindergarten Guide の部分が大幅に変更された改訂版が出された。関信三によって『幼稚園記附録』の原典とされたのは、この改訂後の版である。関信三が翻訳すべき書として、このように重要な文献を選択したのは大変意味のあることであったが、しかし不思議なことに、彼はピーボデーの書物を、同書が本来そうであるような独立の書物としてではなく、『幼稚園記』の「附録」という形で出版した。しかもさらに

その付録として、第二の書まで加えているのである。どうしてこのような変則的な構成が行われたのであろう。

その直接的な理由は、それらがドゥアイ (『幼稚園記』原典の著者) の推薦書だったことにある。実際には、ドゥアイはピーボデーの前掲書とカルキン (Calkin) の “Primary Object Lessons” を推薦していた。関信三は、ぜひとも両書を翻訳したいと思ったが、カルキンの書はすでに文部省から出版されることが決まっていたため、やむなくその代わりとしてウェルチの “Object Lessons” を入れることにしたと思われる。けれども同書は本来小学生向けであったため、関は「ヤヤ高尚ニシテ唯其長齡兒女ノミニ授クヘキ例タルヲ以テ其幼齡兒女ニ於ルヤ教師宣ク斟酌スヘシ」と注釈を付けざるを得なかった。なお、カルキンの前掲書は、明治十年五月に、「加爾均氏庶物指数」として文部省から出版されている。

こうしてみると、『幼稚園記附録』は、ドゥアイの書を主著とし、その推薦図書をもってそれを補完強化しよ

うという、非常にはつきりとした意図を持って構想された作品であったことがわかる。彼はドウアイが推薦した二書を加えることによって、彼の『幼稚園記』を完成しようとしたのである。『幼稚園記』の翻訳、幼稚園着工、竣工、開業、園長就任と、慌ただしい動きが続くなかで、彼は休むことなくこれらの翻訳に着手した。頼まれた仕事ではない、本当はまだ誰もよく知らない幼稚園というもの。その完全なる知識を世に提供すること、彼はそれを自らの責務と考えていたのではないだろうか。

幼稚園とは何か

Kindergarten Guideの最初の章は、そのものズバリ、KINDERGARTEN-WHAT IS IT?、「幼稚園とは何か」



である。関信三は第一章「園説」としてそれを訳している。今回はこの「園説」について考えることにしたい。「幼稚園とは何か」を手さぐりで尋ね求めていた関信三にとって、これは願ってもない章であつたらう。原典は、外国から移入された幼稚園に出会ったピーボディーが、彼女なりに実践したのちに、批判的に再検討を加えて書き直したものである。ピーボディーと同じく、海外から移入したばかりの幼稚園で模索している関信三にとって、この章は格別のものであつたに違いない。

ところが、私の予測はみごとに裏切られた。『幼稚園記附録』を改めて読み直して最も驚かされたのは、「園説」のあまりの短さだった。おもしろく読み始めたら、突然ふっと終わってしまった。何かの間違いではないかと前後の頁をめくってしまった。『幼稚園記附録』は和綴じで四十二枚八十四頁、一頁は十行からなる。そのうち「園説」は二頁半、つまり、全二十五行。それが『幼稚園記附録』第一章のすべてなのである。

彼が訳したものの原典での位置を知るために、同章全

体を要約すると、およそ次のようになる。

幼稚園は旧来の専制的な学校とは違う。フレーベルが自から創設した施設に「子どもの園」（すなわち幼稚園）という名前を与えたのは、その名前によって、子どもを扱う精神と方法を象徴させるためであつた。フレーベルの「子どもを扱う精神と方法」とは、園丁がそうであるように、教師、すなわち「心の園丁」が、子ども独自の個性を無視したり、子どもの性格を前もって決定する力が自分たちにはないことを自覚し、子どもが本来持っているものが、善と美に向かつて―その目的は神であるが―よりよく開花するように助けることである。また、一定の時期になれば、子どもは子どもの十全な社会の中に置かれなければならない。子どもは、大人の洞察力に支えられた子ども社会での経験を通して、内的にも外界とも調和した成長をすることができる。幼稚園は、子どもたちが自発的に活動し、想像力を伸ばし、自分を自由に表現し、他者と協調し、宇宙の秩序を知り、良心に心を向けることができる場所である……。ピーボデーは以

上のことを強調しながら、キングダーガルトナーのあり方、幼稚園の具体的な方法、たとえば恩物を使う目的や方法などについて説明し、積極的に幼稚園を開設することを勧めている。

このような内容のうち、関信三が訳したのは、フレーベルが彼の施設に「子どもの園」と名づけた理由を述べたパラグラフである。幼稚園論の基底となる欠くべからざる部分ではあるが、全体から見ればいわば導入部であつて、それだけを取り出して「園説」とするには無理がある。また、同パラグラフのうち最後の数行は訳していない。客観的に見て、関信三はピーボデーが書いたものの全体を見渡すことなく、文脈と離れて任意に一カ所だけを取りだし、それに「園説」と冠したと言わざるを得ない。

ドゥアイにはほとんどなかった幼稚園論に関信三はここで初めて出会うことになったのだから、彼がそれをどのように受け止めているかは非常に興味あるところであつた。そのピーボデーの幼稚園論を彼はこのように

扱っていたのかと、実に意外な思いだった。

一体これはどういうことであろう。幼稚園紹介を急がねばならない関信三にとっては、やむを得ない現実的な処理だったと考えるより他ないのだろうか。けれどもどうも納得できないまま、関信三の他の著作も読み進めているうちに、このことを考える上での手がかりを見出した。彼はこの短い「園説」を、多少の字句の変更を加え、あるいは途中で別の文章を入れるなどして、彼のすべての著作の中で繰返し使っていたのである。もしこの「園説」が彼にとって満足のいくものでなかったとしたら、はたしてそれを他の著書にも繰返し使ったりするだろうか。関信三にとって、「幼稚園とは何か」の答えは、「園説」において必要かつ十分に語り尽くされていたに違いない。



「園説」

では、関信三の「園説」とはどんなのであったのか、全二十五行を紹介してみよう（行頭番号筆者）。

第一章 園説

- 1 幼稚園トハ即チ幼稚子女ノ遊園ナリ而メ其創設者フ
- 2 レベル氏ノ目的ハ幼稚園ノ精神及ヒ其方法ヲシテ果
- 3 メ其名ヲ適切ナラ令ルニ在是フレベル氏ノ身自ラ自
- 4 然法ノ發明者ト称呼セシ所以ナリ凡ソ園圃ヲ耕植ス
- 5 ル者ハ必ス先各種草木ノ天質ニ異同アルヲ察知シ而
- 6 メ其天質ニ適合シ地質ノ濕燥及ヒ氣候ノ寒温等ヲ計
- 7 軟セサル可カラス是其急務ニシテ一日モ欠可カラサ
- 8 ル所ナリ故ニ草木ノ天質如何ヲ顧ミスシテ其開花結
- 9 実ノ美栄ヲ期スルモ豈得ヘケンヤ是ヲ以テ園丁ノ最
- 10 モ老練スル者ハ必ス其天工ヲ養成シ曾テ基本質ヲ逆
- 11 制セス草木ヲシテ不羈自由ノ境ニ生長セシム然ト雖
- 12 モ野外濫生ノ蔓草雜木ノ如ク荒蕪ノ地ニ棄テ、顧ミ
- 13 サルニ非ス常ニ注意添力シテ其疾蟲ヲ攘斥シ其穢物

- 14 ヲ洗除シ或ハ荆棘稗莠ノ蔓生スルトキハ勉テ耕鋤シ
- 15 以テ保養怠ラス此ノ如クナルトキハ必ス将来花実ノ
- 16 開結ヲ期シテ待ヘキナリフレベル氏夙ニ茲ニ著目シ
- 17 自ラ謂ラク無性ノ草木既ニ固有ノ美栄ヲ完成スルニ
- 18 ハ必ス本質適切ノ培養法ヲ施サ、ルヲ得ス況ヤ有性
- 19 ノ人類ニ於テヲヤ嬰兒ト雖モ必ス適切ノ教育法トカ
- 20 ルヘカラス此ニ於テ多年其經驗ニ従事シ以テ嬰兒ノ
- 21 性質ヲ究知シ遂ニ幼稚字ノ一科ヲ發見セリ抑古來偶
- 22 嬰兒ノ教育ニ注意スル者アリト雖モ其固有ノ活發ナ
- 23 ル氣力ヲ制止シ唯窮屈ノ中ニ生長セシム故ニ其天稟
- 24 ノ精神ヲ暢達シ固有ノ知覺ヲ發揮スルヲ得ス此弊習
- 25 ヲ看破セシハ実ニフレベル氏ノ卓識ト謂ツヘシ

関信三の「園説」とは何か。要約すれば、幼稚園とは、植物が天質に合う環境を整えられ適切な世話を受ければ自ずと開花結実するように子どもを教育する所、ということになろう。関の訳文ははじめの四行を除いて全体に読みやすく、わかりやすい。日本人にとってなじみ

深い比喩が使われているからであろう。文章にも張りがある。その描写があまりにも自然で、一気に読ませてしまうので、もしその前後に「フレibel」という名前や「幼稚園」という語がなければ、それが外国文献の翻訳であるとは、誰も気づかないのではないかと思われるほどである。

関信三にとって、子どもの「天稟ノ精神ヲ暢達シ固有ノ知覺ヲ發揮」し、「将来花実ノ開結ヲ期シテ待」つ、というフレibelの幼稚園は、彼に未来への希望を抱かせ、彼の精神を励ますものであつたろう。彼は、幕府崩壊、開国、開教という激変とともに人生を歩み、その過程で徹底的な挫折と失望を味わつた。その彼が今、凜として樹木が伸びゆくように、ふくいくと草花がかおるように、豊かに果実が実るように、おさなごの成長を信じる幼稚園に出会つたのである。

けれども、この「園説」を繰返し読むと、その多くが、特に四行目から十六行目まで、つまり中心部分のすべてが、植物の育成の描写に終始していることに、少し

違和を覚える。また、「園説」を原典と詳しく対応させてみると、十六行目以降は該当パラグラフにも、同章全体にもその原文がないことに気づく。

ということは、彼がピーボデーの「幼稚園とは何か」の章から翻訳したのは、全二十五行の内、さらに少なくとも、前半の十六行のみということになる。しかも最初の四行以外は、ひたすら植物の育成の描写のみを取り上げているのである。まるで、彼にとってはそれのみが必要だった、というかのようである。前述のように、彼は該当のパラグラフを途中までしか訳していない。さらに、途中で切り上げた文章に、別の文章をつなげている。彼の意志で二つの別のものをつなげたということからすれば、「園説」は「翻訳」ではなく、「創作」ということができよう。



日本では古くから子育てが植物の成長に比して語られてきた。そうしたいわば共通の土台の上で、それぞれの時代や背景に応じて、独特の思想や具体的な方法が展開されてきたと言えるのではないだろうか。しかし、関の「園説」では、具体的な思想や方法に全くふれず、ただ比喩のみが掲げられている。しかも草木を育てる上での「技」が、「美」を感じさせるまで高められて表現され、あたかも比喩自体が目的であるかのような趣になっている。

彼はなぜそのように表現したのであろう。彼の「幼稚園の説」と題する論説（『東京日々新聞』明治九年十一月二十八日付）に、次のように大変印象的な記述が見られる。「盆栽家」と「植物家」の比喩である。「彼の天質を顧みず唯人口を是れ競ふ一種の盆栽家なる者の草木を栽培するや其花容を奇とし其葉色を奇とするを喜び故意に天造の花葉を窘盛するを以て却草木固有の美栄を完成するを得ず是れ植物家の肯て取らざる處なり故に園丁の最も老練する者は……」（以下「園説」十行目へと続く）。

関信三が、たとえとして「日本化」の極みとも言える「盆栽」を持ち出していることは、私にはきわめて興味深く思われた。この論説は、彼が後述の講演をした際の際の原稿と思われることと、この時が「園説」が発表された最初であることから、この比喩は、関信三が幼稚園をどのように受け止めたかを初々しく、率直に表しているように思う。

私は『幼稚園記』を読みながら、関信三は自らが翻訳しているものをよく理解していないのではないかと感じていた。おそらく、私の感じ方はそれほどの外れではないと思う。そうした関信三がピーボデーの書を読み始め、「幼稚園とは何か」の章に植物との比喩を見出した時、彼の心の中にたちまち、これまでになくしつくりした感じ、これだという気持ちが湧き起こったであろうことは想像に難くない。彼の想像力は刺激され、自由な表現が生み出された。それが自然に盆栽の比喩と結びついたのである。関信三がピーボデーの「幼稚園とは何か」から取り出したのは、見知らぬ外来物ではなく、自

らの肌になじんだものであった。彼が無意識のうちに手に入れようとしたのは、思想ではなく、幼稚園が日本に受け入れられるという確信、さらに言えば、自分自身がこれを受け入れて恥じるところがない、という確証だったのでないだろうか。そして、彼はその確証を手に入れたのである。

しかし、ピーボデーによって、そしてもちろんフレーベルによって、「園」に對置されているのは「野」であって、「盆」ではない。幼稚園の「日本化」。いつのまにか、フレーベルの思想が逆転されている。あるいは矮小化されている。

盆栽の比喩は、また、幼稚園が日本に受け入れられた土壌を示唆している。幼稚園はまず、「野」にある子どもではなく、「盆」上の子どもに、子どもの教育に手をかけ過ぎるほどにかけられる、一部の人々に向けて語りかけられた。幼稚園開設直前に東京女子師範学校において、「日本国婦人之会議」という婦人のための集会が開かれた。その二回目の会で、関信三は「幼稚園の説」と

題する前掲の講演を行つてゐる。東京日日新聞によれば、集まつたのは「何れも精神良家の閨秀にて凡そ三百五六百人」であつた。この会で関信三は彼の「園説」を説き、盆栽の比喩を語つた。彼の説も他の演者の講演、「母親の心得」、「一家経済の心得」と同じく、間違ひなく受け入れられた。記者は、「何れも婦人女子の為に成る結構なお咄しで五座りました」と報告している。

幼稚園がアメリカに紹介された当初は、幼稚園はドイツ思想によるドイツ人のためのものであるから、アメリカ社会に導入するのは適當ではないという論が根強くあつた。これは、幼稚園を広く公教育の中に取り入れようと考える人々にとつては、乗り越えなければならぬ高い壁であつた。ピーボディも彼女の多くの著述の中で、それを論破する努力を繰り返さなければならなかつ



た。しかし、関信三の「園説」は当時の人々に無理なく受け入れられた。そして長く、今日に至るまで、当然のごとくに受け入れられている。しかし、そこにははじめから、日本社会に否定されるべき何ものもなかつたと言つた方がむしろよいだろう。

日本の幼稚園は外国文化の移入であるとされる。もちろんその通りである。しかし、はたして本当にそうだったのか。関信三の「園説」は、「フレイベルの幼稚園」の説ではなく、まぎれもなく「日本の幼稚園」の説であつた。関信三というひとりの人間を経て、「日本の幼稚園」が誕生したのである。

「園説」によく現れているように、「幼稚園記」において直訳的傾向が強かつた関信三は、以後しだいに自らの意識的な取捨選択によつて翻訳文を構成する度合いを強めていく。今回は、関信三が理想の幼稚園をめざして著した『幼稚園創立法』について書いてみたい。